旅の理由

ten

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

旅の理由

【Nコード】

N5654H

【作者名】

ten

【あらすじ】

近道に倒れていた少年からディケイドライバーを託された平凡な高校生だった少年の話

EPISODE 0

ヒーローなんていない・・・そう思っていた・・・あの日近道で裏路地さえ通らなかつたら。

その日、路地を走っていた僕のために一人の少年が倒れているのを見つけないければ・・・

EPISODE 1 DECADE (前書き)

こんな風にちょっと文章が下手ですが、よろしくお願ひします。あと、一章の長さがバラバラになるかもしれないのでよろしくお願ひします。

EPISODE 1 DECADE

「おい！カケルー！今日俺と一緒にゲーセンいかな？」

「き、今日は遠慮しとくよ。ほら、生徒会だし。」

「か〜！やっぱ生徒会長さんは忙しいねえ。」

いつも通りの会話が流れていた。この時までには・・・

その夜、生徒会の用事でおそくなった僕は町の中を走っていた。

「・・・まずい。相当おそいな。まさか補導とかされたり・・・」

時刻9：40だった。いつも通りの道を行けば間違いなく30分はかかる。

10時以降に家に帰るのは僕としては許せなかった。

一人暮らしたったけど、なぜか許せなかった。

「しかたない・・・たまにしか通らないけど近道するか。」

そう思っ僕は近くの裏路地に飛び込んだ。

薄暗いが文句はいえない。

ふと、僕の目に飛び込んできたものがあつた。

「え・・・ひとが倒れてる？」

思わず僕はその人き駆け寄つた。

「大丈夫ですか!？」

今おもえばこの瞬間が運命の分岐点だった。

「・・・君は？」

少年は突然声を掛けてきた。

「え・・・門矢カケルだけど・・・」

「先代と同じ名字なんだね・・・」

ふと少年の隣を見ると、白いバツクルが落ちていた。

「これ、君のかい？」

「さっきまではね・・・今は君のものだよ。門矢くん。」

意味不明なことを言う少年を僕は担いだ。

(にしても、これが今は僕のものってどういうことだ?)
ふと、疑問が頭に浮かんだ瞬間だった。

「・・・見つけた・・・」

謎の声が出た。そして、僕の背中にゾクツとしたものが走った。

振り向きたくなかった。しかし、僕の首はゆっくりと背後を振り向いてしまった。

そこには、全身が灰色の怪物がいた。

「ウワァァァ!」

僕はそう叫ぶと同時に少年を抱えたまま走り出した。

この少年とは一緒のいないといけない。そんな気がした。

おもむろに、少年が口を開いた。

「ねえ、門矢くん。」

「な、なんだよ!?こんなときに!逃げないと死ぬかも・・・」

「逃げちゃだめだよ・・・変身しなきゃ・・・デイケイドに・・・」

EPISODE 2 DECADE (前書き)

「二話で」DECADE「を終わらせるつもりが三話になってしま
います。」

EPISODE 2 DECADE

「は？変身？それって僕が戦うってこと？」

いきなり解き放たれた驚愕の言葉に口がぽかんと開いた。

「うん。そうだよ。君がディケイドに変身するのさ。」

「冗談じゃないよ！何で僕が戦うんだ！？」

「それは君が二人目だからね。」

もし僕の思考回路が平常だったら気になる二人目という単語が気になっただろう。

しかし、かなり慌ていた僕はパニックに陥っていたために、そんなことに構っている余裕は無かった。

「で、でもどうやって・・・」

「知ってるんじゃない？君なら・・・」

僕は手に握っている白いバックルを見つめた。

(あ・・・れ・・・?)

気づけば僕は立ち止まり、バックルを腰に当てていた。

「これは・・・」

そして、僕はカードをバックルの中に入れて・・・

♡KAMENRIDE♡

バックルを閉じた。

♡DECADE!♡

気づいたら僕は・・・ディケイドに変身していた。

「あ・・・え・・・？」

「ほら。戦ってよ！僕、非力なんだから！」

そういわれても、なぜ自分が変身方法を知っているのか分からなかった。

そのため、灰色の怪人の一撃をまともに受けてしまった。

「やったな・・・！」

♡ATTACKRIDE ILLUSION!♡

「ATTACKRIDE BURST！」

二枚のカードの力で分身してから怪人を銃撃した。

「いけえええ！！！」

銃撃をまともに受けた怪人は、相当苦しんでるように見えた。

「これで・・・終わらせる。」

「FINAL ATTACKRIDE D、D、D、DECADE

！」

僕が飛び上がると、目の前にカードの映像が大量にでてきた。

そして僕はそのカードの中を通り抜け、キックを怪人に当てた

怪人は青い炎を上げながら灰となって崩れ落ちた。

「ふーん、オルフェノクをあんな短時間でねえ・・・」

「あれ、オルフェノクっていつの？」

「うん。別の世界から、僕を狙ってきたんだ。」

「・・・え？」

オルフェノクと呼ばれているらしい怪人を倒した帰り道に僕はアマデウスと名乗った少年に色々なことを聞いてみた。

「あいつは、ファイズの世界から僕を殺しにやってきたんだ。」

「な、なんで？」

「教えるワケ無いじゃん。」

その言葉で、僕は少しムカツときた。

「ちょーじゃあね！迷惑かけたね。でもディケイドライバーは君に渡しておくよ？やつと見つけた二人目なんだから！」

「二人目って一体？」

僕がその疑問を口にしたときにはすでに少年はいなかった。

「逃げたな・・・」

そう呟きながらふと時計を見る。

現時刻 10:30

「さ、三十分もオーバーしてるし・・・」

EPISODE 3 DECADE (前書き)

今回は、比較的ながいです。本来つくるはずがなかったために、時間がかかってしまいました。

EPISODE 3 DECADE

昨日の夜は、謎の少年にデイケイドという戦士になって戦えといわれた上にそのために自分の中の門限を逃してしまった。

そのため、今日の僕は少しイライラしていた。

放課後

「・・・カケル。昨日なんかあったか？」

「いいよ・・・言ってもどうせ信じないし。」

朝、起きてみたときに夢だと思ったが、机の上にあったデイケイドライバーをみて、昨日のことは現実だと認めるしかなかった。

「ちよつと疲れ目だから帰るよ・・・じゃ。」

僕はそっけなくそういうと、帰路に着いた。

（今日はいつもの道を通っても帰れそうだな。）

そう思い、僕は駅の方へと走り出した。

キヤー！

「・・・おいおい・・・まさかな・・・」

僕の耳に女性の悲鳴が聞こえてきた。

普通なら、痴漢されたか、ヤクザに襲われたとおもっだろうが、昨日あんなことがあったために、

（怪人に襲われてんじゃないだろうな・・・）

という選択肢もうまれてきていた。

急いで駆けつけてみたところ、第三の選択肢が正しいようだ。倒れている女性に駆け寄ってみると、女性の体はまるでガラスのようには透き通っていた。

「え？おいおい・・・もう死んでんのかよ・・・」

ふと、目を少しおくにやると、あの少年がいた。

「・・・ざけんなよ・・・あいつのせいでこの人死んだのか？」

違う。大体、なぜ怪人があいつのこと追ってきたんだ？

「ふう、また？いい加減にしてよ！もうバツクルは持ってないんだから！」

「おまえ・・・また襲われてるのか？」

「あ！門矢君！また僕を助けてくれるんだね！」

「ふざけないでよ！人がしんでるんだぞ！？なんでそんな冷静なんだよ！」

僕は少年の向かって叫んだ。人が一人死んでいるのに、平然とした彼の態度が気に入らなかった。

「だって襲われるのがぼくじゃなかったらいいんだよ？それよりも、あれ倒さないとまた被害が出ちゃうよ？」

少年のもつともな言葉に前半部分の文句はのどで引き返すことになった。

「・・・ッなんで君はそう・・・変身ッ」

前は突然のことだったために、あわてたが、今回は言ってやった。

☆KAMENRIDE DECADE☆

デイケイドに変身した僕はすぐさま怪人・・・ファンガイアというらしい・・・に飛び掛った。

その途端、ファンガイアが僕の前から姿を消した。

そして、背中にダメージを受けてしまった。

「・・・どーやら、動きが速いみたいだね。」

「君は・・・傍観者にでも・・・なった・・・つもりか！」

☆KAMENRIDE KIVA☆

☆FORMRIDE KIVA GALULU☆

「こいつでどうだあ！」

俊敏性の高い、キバ ガルルフォームで相手を切りつけると、キバフォームに戻り、カードをいれる。

☆FINAL ATTACKRIDE KII, KII, KII, KIV

A！☆

あしを振り上げたまま高く舞い上がり、僕はファンガイアに「ダークネスムーンブレイク」を当てた。

キバの紋章とともに散るファンガイアを尻目に、僕は少年に駆け寄った。

少年は……寝ていた。

門矢宅

「うくん。ここはどこ？」

「僕の家だよ。いいかな？人があんなに苦労しているときに自分だけスヤスヤと寝るなんてことは許さないからね？」

「ほーい」

少年を後で殴るとして、僕は気になることをたずねた。

「デイケイドの事はわかったんだ。これは何？」

そう言いながら、ぼくは水色の空白のカードを九枚とりだした。

「ああ、それ？君が集めなきゃいけないものだよ？」

「一体何なのか教える！」

「……そのカードを集めるために君は九つの世界を旅するんだ……」

その途端、少年が消えた。そして後ろを見ると……

そこにはバラの花びらが舞う玉座の絵があった……

EPISODE 4 KIVA (前書き)

カケ「おい、作者さ〜ん。

て「何？いま、忙し・・・」

FINAL ATTACK RIDE D・D・D・DECADE

カケ「長年放置をやらかした作者を破壊する！」

ア「キャラ崩壊してない？」

EPISODE 4 KIVA

「・・・ここは一体!？」

家から外に出た僕は驚愕した。

周りの風景が全く違う。遠くに見えるビルにはドラゴンの首が突き出ていた

「ねえ! 一体ここは何処!？」

「キバの世界・・・かな?」

「なんでこんなところに飛んだんだろ・・・」

「君が^{破壊者}デイケイド(二代目)で、9つの世界を巡る者だから・・・かな?」

歩きながら、ぼくとアマデウスは街を歩いていた。

途中で悲鳴が聞こえる。

「案の定ファンガイアなの?」

ちよつと裏路地に入ったところにガラス状になった女性の死体があった。

そして、ぼくの目の前にファンガイアが一体。

「いつとくけどひとを襲ったら容赦しないからね?」

「変・・・」

しかし、それは、どことなく黒っぽいコウモリに阻まれた。

「おい、ソウ。また反逆者だぞ?」

「わかっているよ・・・キバット・・・」

ガブリ

ソウと名乗った青年にステンドグラスのような紋章が浮かび上がり・・・

「変身・・・」

彼はダークキバへと変貌を遂げた・・・

「・・・ねえ。あれって・・・キバなの?」

「ん？キバといえはキバだけど？・・・ちなみに僕は用事ができたので、消えます。」
意味不明な言葉を発して、アマデウスは本当に銀色のオーロラのかなにきえた。

「ってちよつと待てー！ー！勝手にどこかへ消えるな！」
僕の叫び声は虚しく世界に響いた。

EPISODE 5 KIVA (前書き)

カケ「ねえ、作者。今回もキバは出てこなかったね。」

t「いつかは出すよ？安心して見ててください。」

カケ「ふん。ならいいよ？」

t「なんか、FAR構えてるのは、気のせい？」

EPISODE 5 KIVA

「まて〜!!」

僕は銀のオーロラに突進したが、ぶつかる前に消えてしまった。

「あ〜もう！僕ってこの世界で何やればいいの！？全然わかんないよー！」

「貴様ら！卑怯だぞ！」

僕が振り返ると、多分キバもどきだろう・・・は、三体のファンガイアにがんじがらめにされていた。

「あのキバもどきって・・・いや、実力はあるんだろうな。」

「よ、よし！ついにこの時が来た！キングを倒し、私がキングとなる日が！」

・・・あれ？あのファンガイアのセリフからすると、あれって王様・・・なのか？

「とりあえず、あなたたちの目的はなんですか？」

「だ、誰!？」

「・・・目的は・・・なに？」

「ふん・・・今から死ぬ奴に言う必要はないだろう?・・・殺れ。」

「・・・やっぱ？」

僕は早速バックルを取り出した「変身」

☆ K A M E N R I D E D E C A D E ☆

「さてと・・・3対1かぁ」

☆ A T T A C K R I D E S L A S H ☆

「さらに。」

☆ A T T A C K R I D E I L L U S I O N ☆

「くくくよくよく」

3対3となり、僕はファンガイア三体に同時にディケイドスラッシュを浴びせた。

「貴様ぁー！」

ハ K A M E N R I D E D E N - O }

電王になつた僕は確実に攻撃を加えていった。

「・・・おい、キバツト。何だ・・・アレは・・・」

「さあ・・・おれも見たことがない。」

全然出番がない闇のキバだった。

ハ A T T A C K R I D E B O K U N I T S U R A R E T E
M I R U ? }

電王のソードフォームがロッドフォームに変わった。

そして・・・

「僕に、釣られてみる？」

「・・・場には妙な沈黙が走つた。」

「・・・電王つてどんな奴なんだろ？あつたら倒そうかな？」

そんな物騒なことをいいながら、とりあえず目の前のファンガイアたちに怒りをぶつけることにした。

ハ F A I N A L A T T A C K R I D E D ・ D ・ D ・ D E N -

O ! }

「ハアアアア！」

僕は、ファンガイア三体をまとめてデンライダーキックで粉碎した。

EPISODE 6 KIVA

「なんて奴だ・・・三体のファンガイアを一気に？」

「いや！まだ一体残って・・・」

FINAL ATTACK RIDE D・D・D・DECADE

その最後の一体も、ディメンションキックで抹消された。

「これで全部？ 電王・・・お前は僕のプライドを破壊した・・・」

「お、おい。おまえ、一体誰だ？」

・・・そういえば、この目の前にいる少年の存在を忘れていた。

「君って・・・キバ？」

「！ 見られていた・・・か。」

「とりあえず、案内して。君の城へ。」

元の世界

「カケルが行方不明！？ちょっと！なによそれ！」

「そつや！生徒会はどないすんねん！」

「・・・君たち。一応目の前にいるのは刑事さんなんだがね？」

「でも！・・・まさか・・・カケル君って結構頭いいし、その才能を見込んだ黒スーツの男に誘拐されたんじゃない？」

「はあ！？」

応接室で二人の生徒と、先生一名、刑事一名が騒いでいた。

実質上、騒いでいるのは生徒で、先生はそれをなだめ、刑事は沈黙状態だ。

先「木之下さんも、水城君も静かにしてください！」

刑「そうです。我々としても、調査はしているんです。ただ、多少

不可解な点が……」
木之下「不可解な点……ですか？」
刑「はい。彼が最後に目撃された場所には、女性ほ服と謎の灰があるんです。」
水城「ちょーまで！まさかそれがカケルに仕業やゆーんやなかるーな！」
刑「いまは……まだ分かりません。ただ、彼が容疑者に一人だということとは覚えておいてください。」

キバの世界 キャツスルドラ内部

カケ「それにしても、よくやるなあ。ドラゴンを城に改造なんて。」
ソウ「きみは一体何者なんですか？キングとして、聞きたいんですけどね？」

カケ「分からん。こないだまで、平凡な学校の生徒会長だった男だ。」

ソウ「じゃあ、君の名前は？」

カケ「……門矢カケル。君は？王様？」

ソウ「……っ 登想だ。」

こうして、この世界の王と、ダイケイド破壊者という役割をおしつけられた少年の自己紹介は終わった

EPISODE 6 KIVA (後書き)

カケ「作者。今回も、キバは出てこなかったね？」

t「次で出します。にしても、文章が下手だなあ……どうしよう。」

┌

EPISODE T DECADE (人物紹介)

ここでは、おもに人物紹介をさせていただきます。
まずは主人公から。

門矢翔 仮面ライダーディケイド

謎の少年アマデウスの策略？により9つの世界を旅するように仕組みられた少年。

すでに9枚の仮面ライダーのカードは揃っているが、何故か水色のカードFKRのみがブランク。

アマデウス

翔を9つの世界への旅へといざなった少年。

その正体、目的は一切謎。

木之下夏美

翔の同級生。学校の帰り道に、錦と一緒にアマデウスと出会い、ディケイドの旅に巻き込まれてゆく。

水泳部。

水城錦 仮面ライダー西鬼

同じく翔の同級生。夏美と一緒にアマデウスと遭遇。

「男で、ディケイドの旅に同行するんだし、こんくらいはないとね？」という理由で変身音叉（赤）を渡された。

EPISODE T DECADE (人物紹介) (後書き)

今は・・・まあこのくらい。随時補給します。

ちなみに・・・西鬼は気に入ったのでレギュラー化。

EPISODE 7 KIVA

キャツスルドラン 玄関

??「え〜!? 想兄さん、今日も会えないの?」

ファ「も、申し訳ございません! 森羅さま!」

森羅「べつに、様づけしなくていいんだけどな……」

森羅と呼ばれた金髪の少年が、キャツスルドランの戸口に立っていた。

一体のファンガイアがそれに対応している。が、かなり困惑ぎみだ。
森羅「で? 今日誰と面会してるの? それとも、仕事をさぼったツケがきた?」

ファ「前者ですが、なにやら面会人が妙な空気で……」

森羅は顔をしかめる。

森羅「それって、違反者のファンガイアじゃ……」

ファ「それは無いとおっしゃっておりますが……って何を!」

森羅「きまつてるじゃん! 想兄さんに会いに行く!」

ファ「ちよっそんなことしたら怒られるのは、私……もういいし!」

面会室

想「多少聞きたいんだけど、あの姿は? 鎧キバの類じゃないよね?

翔「まあ……デイケイドっていうらしいけど……」

想「ふ〜ん……異世界から来たんだよね? 家族とかは心配してない?」

翔「いや? 家族は……いないよ。君は?」

想「……いるとしたら、弟が一人。」

次の瞬間、面会室の窓が割れた。そこから青い狼男が飛び込んだ。

想「またか……」

翔「よくあることなのか？」

??「ついに、あつたね！想兄さん！」

狼男にまたがつている少年が、想を指さしていった。

想のほうは……完全に遠い目をしている。現実逃避でもしているのだろう……

想「森羅……窓から飛び込んでくるのはやめてくれ。」

森羅「いつも逃げてる想兄さんが悪い。」

想「今は、客がだな……」

翔「で？こいつが弟か？」

想「……うん。弟の紅森羅。」

森羅「きみがお客？あ！紅森羅です。こちらが部下のガルルです！次狼つて呼んでいいよ？」

……あだ名、名前と一文字もあっていない。普通逆じゃないの？次狼が本名であだ名がガルルとするほうが妥当な気が……

森羅「ともかく！今日は兄さんと映画に行く予定だったんだから！」

想「勝手にそんなスケジュール組むなよ……」

そんな兄弟のなかをぶち壊しにするかのように、ファンガイアが飛び込んできた。

ファ「た、大変です！町でファンガイアではないなにかが暴れております！」

翔（こいつらの敵って何種類いるんだ？）

思わずそう思ってしまうしかない状況。ファンガイアではない別の何かといわれると、そう思ってしまう。

翔「とりあえず、行ってみよう……」

いつのまにか、兄弟はいなくなっていた。

EPISODE 7 KIVA (後書き)

t「ようやく、キバの変身者だせたよ・・・」
カケ「これで、将来安泰ってか？」

森羅「まあ、次回は僕が戦います」

カケ「・・・ブラコンが。」

森羅「は？」

EPISODE 8 KIVA (前書き)

t「今回はいつもより、長めです。」
カケ「こ、これは・・・次でキバ編が終わる予告か？」

EPISODE 8 KIVA

翔「なんだ・・・これは・・・」

それが町の惨状を見た時の僕の感想だった。

翔「仮面の人間が大量に？しかも、人が人を襲うなんて・・・」

森羅「やっぱりレジェンドルガが・・・翔。ちょっと手伝ってくれる？」

翔「なにするつもり？」

森羅「これの本体を・・・潰す！キバット！」

森羅の手にコウモリ型のモンスターがかみついた。
ガブリ。

森羅の顔にステンドグラスの模様が広がる。

森羅「変身。」

紅森羅は仮面ライダーキバへと変身した。

翔「・・・この人たちは・・・？」

キバ「大丈夫。本体を倒せばもとに戻るよ。」

翔「だったら・・・僕も戦う。」

キバ「・・・そうしてほしいうて言ったよな」

僕は少し笑った。

「KAMENRIDE DECADE」

DCD「で、本体は？」

キバ「あのビルの上。」

キバが指さした先には、ミイラ男を想像させるような怪人が立っていた。

DCD「アレね・・・」

マミー「これでアーク様の復活が・・・やはり、あの方に感謝しないとな・・・」

DCD「そのあの方について、教えてもらえる？」

マミー「ふん。キバも来ているのか？」

DCD「森羅君は、君らの王様の復活を止めに行った。君は僕で十分だから。」

マミー「ふん！舐められたものだな、私も」

「ATTACKRIDE BLAST」

DCD「無駄口たたいてると・・・死ぬよ？」

突然の襲撃に、マミーはあわてた。

マミー「貴様！」

DCD「さて・・・封印といったらこれかなあ？」

「KAMENRIDE BLADE」

マミー「死ぬ！」

マミーは包帯を飛ばすが、オリハルコンエレメントによりはじかれる。

DCDB「やっぱこれにして正解だったな・・・」

マミー「このくらいで・・・」

「ATTACKRIDE MACH」

DCDB「ハッ」

僕は素早くレジエンドルガに近づくと・・・

「ATTACKRIDE BEAT」

DCDB「それと・・・うわ!？」

マミーを力いっぱい殴りつけたかと思うと、包帯に足をとられた。

マミー「捕まえたぞ？デイケイドとやら・・・さあ、こっちに来い！」

マミーは包帯を自分に引き寄せるが・・・

「ATTACKRIDE SLASH」

マミー「・・・は？」

DCDB「って・・・デイケイドのと同じ？」

リザードスラッシュに見事に切り裂かれた・・・

DCDB「まあ、いいか・・・包帯もほどけたし・・・」

FINAL ATTACK RIDE B・B・B BLADE
デイクイドはマミーにライトニングソニックをくらわせると、魔界城へいそいだ。

水城「ありえへん。絶対ありえへん。あいつが殺人事件の容疑者やなんて・・・」

木之元「う、うん！でも、門矢君、なんででてこないんだろ？」
二人の生徒が帰り道にそんなことを話していた。

木之元「翔君・・・いつたいどこに？」

??「なら、行ってみる？彼の居る所へ。」

水城「な!？」

後ろを振り向くと、そこには子供が立っていた。

??「彼は今、異世界にいるよ？」

水城「だれや？お前。」

??「遅れてごめん。僕の名前はアマデウス。君らが逢いたい人にあわせてあげるよ。」

水城「それは、本当やるな？本当のそこにおるんやるな？」

アマ「ううん？。今はいない。だけど、もうすぐ来ると思われる場所。」

木之元「アマデウスくん。連れてって。いろいろ聞きたいことがあるの!」

アマ「うん！分かった！でも、その前に・・・」

アマデウスはどこからか、赤いものを取り出す。

水城「なんや？音叉？」

アマ「うん。今から行くところは、とっても危ないところだから。」

それに彼の旅についていくには、これぐらいないとね？夏美さんを
守るためにも。」

水城「おい？そらどゆこと……」

錦がそのセリフを言い終わる前に、二人は銀のオーロラの中に消え
ていった。

アマ「さてと……キバの世界の方はどーなってるかな？」

D C D 「ここか……魔界城とやらは……」

デイケイドは、魔界城の入り口に立っていた。

D C D 「森羅たち……うまくいったかなあ。突入するか……」

??「それはやめてくれる？」

D C D 「……誰？」

そこには、青いローブを着た少年が立っていた。

??「君にアークを倒されると、いろいろ都合が悪い。キバがま
だ本当の姿を手に入れてないいまこそ潰しがいがある。」
エンペラー

D C D 「大体分かったけど？もしかして、この世界にレジェンド
ルガを復活させたのは君？」

??「二代目を倒すためなら、なんでもやるよ？ぼくはね……」
そう言い残すと、青ローブはどこかへと消えた。

D C D 「あいつ……敵ってことで間違いないな……」
そう呟いた途端、魔界城の中から、爆発音が響いた。

D C D 「え？アレ本当？」

デイケイドの視線の先には……アークが立っていた……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5654h/>

旅の理由

2010年10月10日20時41分発行